

令和7年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学 校 名	校 長 名
69	川崎市立野川小学校	伊藤 肇

学 校 教 育 目 標	学校運営方針	今年度の重点目標
かしこく やさしく たくましく ・意欲と好奇心をもって学習に臨む子、生きる知恵をもった子 ・自分、他人、集団を大切にすることを心もった子 ・心身ともに健康な子	○身につけさせたい資質・能力を育む ○元気な体と豊かな心を育む ○安心・安全な学校を育む ○地域に開かれた特色ある学校を育む	・教育力を高め、身につけさせたい資質・能力の育成を図る ・ふれあいを大切に認め合う心の育成を図る ・安心・安全を守り、心身の健やかな育成を図る ・連携を深め、学校愛・地域愛の育成を図る

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策	
1	・教育力を高め、身につけさせたい資質・能力の育成を図る	①基礎・基本のさらなる定着と主体的に学ぶ意欲の育成 ○学習指導要領の趣旨を大切にした主体的・対話的で深い学びの推進 ②資質・能力育成に向けた教育内容の効果的な編成 ○カリキュラム・マネジメントによる学習指導計画の策定○指導体制や諸条件の整備と活用 ③体力の向上 ○体育授業の充実とキラキラ活動の推進 ④指導力・授業力の向上 ○校内研究を中心とした実践研究○学び合いによる授業づくり○GIGAスクール構想実現に向けた研修と実践研究○校外研修への積極的な参加	○今年度よりモジュール学習を朝の時間に組み込み、帯学習に取り組んできた。このことで授業時数を確保し、児童の下校時刻を早めたり、余剰時数を最小限に抑えることができた。今後は学校として、モジュール学習の内容を精選したり、検討したりすることで、日常の学習ではやりきれない内容を積み重ねることで、資質能力獲得のベースとしていけるよう、努力していく必要がある。また、モジュール学習を取り入れたことによって、教科書通りのカリキュラムで進めることが難しいため、各学年でカリキュラムマネジメントをしっかりと行うことが前提条件になる。 ○校内研究は国語科を中心に行って3年が経つ。話すこと聞くことのステップアップ表を活用し、積み重ねができてきたが、学習の動機づけなどがまだ教師主導のところもあり、検討が必要だ。ただし、つけたい力を意識した学習計画を子どもと共に作成するなど改善も見られるようになった。	○モジュール学習ではテーマをもった帯の学習と45分に15分プラスした学習に取り組むことができる。帯の学習では、野川小学校として取り組んでいく系統的な取り組みが有効だと感じるので、実践を積み重ねながら構築していきたい。また、帯ではなく15分の学習で本時に入る前の一人学習の取り組みをすることで、本時の取り組みが充実できるような時間も設けていきたい。普段よりも対話的な学習や練り上げの時間も多く取ることができ、次に活かせることも多いのではないだろうか？ ○モジュール学習の中で、自由進度学習を取り入れ、児童の主体的な学びにつなげることができないか次年度の取り組みの課題としたい。 ○キラキラタイムの内容が変わったのだが、あまり職員に浸透していないと感じている。全市での取り組み例など、体育部を中心にして本校でできることを試行していきたい。
2	・ふれあいを大切に認め合う心の育成を図る	①認め合う学習習慣・生活習慣の育成 ○聴き合う関係を大切にした学年学級経営の推進○読書活動や読み聞かせの推進 ②ふれあい活動の推進 ○野川のつどい、ひだまりハーモニー、集会活動など、内容を精選した異学年交流によるふれあい活動の推進○豊かな感性を育む情操教育 ③特別活動等を通した児童の主体的な取り組みの奨励と支援 ○学年段階に応じた行事や特別活動への児童の参画○個のよさを生かせる支援○あいさつ運動の継続 ④自分づくり友だちづくりと社会性の向上 ○「かわさきし子どもの権利条例」の趣旨を生かした人権尊重教育○共生共育プログラムを年間計画に基づき全学級で実施	○本校の学級経営は、学習指導と児童支援とが車の両輪のように働き、取り組むことを基本としている。あわせて校内研究でも国語科を中心に話すこと聞くことや学び合いによる誰一人取り残されない指導を心がけている。 ○児童会活動を中心に、先生たちにやらされている学校行事ではなく、自分たちでつくる学校行事を目指している。運動会では全力走に個人で取り組むか、リレーでみんなと取り組むかを選択できるエントリー制や全校競技の内容などを児童は考え、実行した。 ○支援教育コーディネーターによるあいさつ運動ステップアップ表が功を奏し、よりあいさつがしっかりとできるように成長した。 ○野川のつどいを再編成して2年目となり、学校以外でも子供たちを支えてくださっている地域の方々がいることを知り、自分たちも地域の一員なのだという意識がより育まれるよう今後も続けていきたい。	○野川小学校の子どもたちのよいところは、友だちに対してとてもやさしいところである。不登校気味の児童が久しぶりに登校した時もさりげなく自然にふるまうことができる。しかし、学校を出て地域で過ごすと考えや判断を誤り、児童同士のトラブルに発展したり、地域の方々に迷惑をかけたりすることもある。 ○運動会等、学校行事も児童の主体性が育まれるよう、時代に合わせた取り組みを行っているが、保護者の方々が経験した学校行事への期待が大きく、まだ今の時代にあった学校の考え方が浸透されていないところがあるので、広くアピールする必要がある。 ○子どもたちに寄り添った人権尊重教育は、我々教職員にとっては必須事項なので、教職員の言動や態度が児童を委縮させることのないよう、全員で確認していきたい。

3	・安心・安全を守り、心身の健やかな育成を図る	①支援体制の確立と推進 ○支援教育コーディネーターを中心に組織的な対応を心がけた全職員による支援教育の推進○教育サポーターやボランティアの確保と運用○教育相談、ケース会議の充実 ②児童指導体制の充実 ○野川スタンダードの共通理解○報告連絡相談などの組織的で共通認識をもった対応 ③いじめを許さない体制づくり ○いじめの早期発見と早期対応○いじめ防止基本方針の策定 ④防犯防災体制の確認と教育の推進 ○児童の安全を最優先した非常時の準備と訓練の実施○安全安心に向けた保護者、地域近隣校との連携強化○情報モラルや防犯教育の推進	○毎月の児童指導全体会を通して、支援教育コーディネーターがていねいにユニバーサルデザインの考え方や個別の指導計画の書き方、実践事例報告、一人一人に寄り添った支援方法などを共有できたことにより、別室で支援しなければならない児童が前半は皆無だった。また、毎日の欠席者(病気やけが)が例年よりもずいぶん少なくなった。 ○しかし、不登校傾向の児童はまだ一定数いて、各担当が細く長くつながっているのが現状である。その手立てとして、学校巡回カウンセラーによる面談やゆうゆう広場、子どもサポート南野川などの外部機関との連携にも取り組んでいる。 ○SNSをめぐるトラブルは毎年のように高学年で起こってしまう。大概是放課後の出来事で学校生活とは無縁なところの話なのだが、その後の学校生活への影響や学級学年を超えた事案となると対応せざるを得ないのが現状で、とても解決に時間がかかる。	○欠席者のおよそ半数がメンタル不調などの不登校傾向児童である。ここの人数を減らすために学校をあげて取り組んでいきたい。次年度は校内教育支援センターのモデル校として、ボランティアが派遣されることになった。人の配置によって、支援教育コーディネーターや後追い非常勤のやることも充実できそうなので、有効活用ができるよう努力していきたい。 ○高学年になると、だいたい学級でLINEグループが存在し、トラブルのもととなる。悪口の書き込みやスタンプの無駄な連打、写真の加工や動画のアップなど起こりそうなことは予想できるので、早くから情報モラル教育に取り組み、保護者と共に身につけていくような仕組みづくりが必要だ。
4	・連携を深め、学校愛・地域愛の育成を図る	①連携教育の推進 ○幼稚園保育園との交流推進○野川中との小中の学びの連携の強化 ②保護者や地域の教育力の活用 ○保護者との連携強化と教育ボランティアの活用○地域学習材や地域協力者を積極的に学習に取り入れた地域の理解と交流の推進 ③開かれた学校づくりの推進 ○学校評価をもとにマネジメントを計画的に進め、全職員による共通理解と保護者、地域への報告○学校運営協議会等の充実○学校からの幅広い情報発信	○コロナが収束し、連携教育ができるようになってきた。これまで通りに中学校の授業参観や教科ごとの交流、幼稚園保育園と1年生との交流など、継続的に取り組んでいきたい。 ○野川の地域らしい学習を生活科、総合的な学習を通して構築し、他教科と結びつけながら探究的な学習につなげていきたい。 ○こここのところ、保護者による学校アンケートを二次元コードから入力する形にして、ペーパーレス化とデジタル化を推進しているが、かといって回答率がものすごく増えるわけではない。 ○学校ホームページを活用して、広く学校のことを発信したい気持ちもあるが、担当者の負担やシステムの理解がなかなか進まないこととミマモルメのメール配信の利便性ばかりに眼がいつてしまい、本来のメール配信の役割が果たせていない。	○連携教育に関係する1・6年生はのために時間が割かれるので、あらかじめカリキュラムに取り入れ、時間の確保に努めていくと無理なく取り組めるのではないだろうか？ ○生活科、総合的な学習の時間のカリキュラムを部会や学年で見直し、教科横断的な視点も入れながら、取り組めるよう4月の早い時期に検討していきたい。 ○学校ホームページの担当から学年1名の担当者にシステムの理解と支援を行えるように整備し、多くの教職員がホームページ作成ができるようにハードルを下げていくような取り組みが必要である。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
学校運営協議会では、学校教育目標具現化のための4つの柱を説明し、年間を通して教育活動や授業の様子を見ていただいた。学習では、どの学級も大変落ち着いて学習に臨んでいる姿をほめていただいた。保護者と児童による学校評価アンケートの分析では、学校行事や集団活動に対して非常に肯定的に捉えていて、学校生活全体に満足感をもっていることや一方で5人に1人の児童が困ったときに大人に話せていない実態が明らかになった。保護者の学習不安はモジュール学習やドリルパークを周知することで解消できるというご意見をいただいた。	今年度は何といってもモジュール学習の取り組みによる時程の変更を試みたことが一番大きいことだ。これによって授業時数の確保と放課後の先生方の時間の確保、帯による積み重ね学習などに取り組むことができた。また5月の連休明けに家庭訪問を取り入れ、運動会を秋の開催にすることで新年度のスタートがゆるやかになり、児童の欠席率が減少したことにつながったものと考えられる。GIGA端末の利用については持ち帰りも含めて、児童の学習ツールとしての役割を再度見直し、学校として系統性のある利用の仕方を模索していきたい。